月夜ばなし

runaway

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜ばなし

【Ｎコード】

Ｎ５１３５Ｙ

【作者名】

ｒｕｎａｗａｙ

【あらすじ】

月にちなんだ短い話を集めました。

【天体観察会】

よく晴れた日の夜、星空観察をしようと勇んで出かけた。
だが今夜は満月。月光が明るすぎて、星がよく見えない。
「この邪魔な満月め！」と怒ったら、「なんだとコノヤロウ」と月も怒ってびかびかと余計に明るく輝きだした。

今では夜も昼のように明るくなり、星を拝めるのは皆既日蝕の時と新月の晩だけになってしまった。

【月食】

夜に散歩をしていたら、急に腹が減ってきた。
周囲にはコンビニも自販機もなく、家に戻るまで我慢できそうにない。ちょうど目の前にあった満月が大福みたいで旨そうだったので、空からもいで食べてしまった。

以来、食べた月の呪いで俺の身体は満ち欠けするようになった。
腹が減って減ってしかたないので、食べまくると腹がボールのように膨らんでまん丸に太り、限界まで太るとまた痩せていくのだ。
そして痩せてがりがりになるとまた食べたくなって――。
「お前、ダイエットとリバウンドの繰り返しは身体に悪いぞ」

月のせいなんだってば。

【酔っ払いのたわごと】

遅くまで酒を飲んだ帰りに、飲み仲間の一人と月見をすることにした。

突発的な思いつきだったので、当然満月なぞ望むべくもない。半月以上満月未満という中途半端な月をカップ酒片手に眺めながら、あることないこと言い合った。

彼がしみじみ言った。

「こうして見ると、月の奴もけっこう可哀想だよな」

「なんで」

「満月の時と三日月の時しか注目されないだろ？　他の日はなんて言うか、準備中って感じでさ」

「そうかもなあ。昇る時間もまちまちだし」

私は月を眺めて思いつくままに言った。

「なんかストリップみたいだよね」

「なんだそりゃ」

「ちょっとずつ欠けて、ちょっとずつ満ちてっていうのがさ。焦らされてる感じがするよ」

「うーん、逆にそう考えたら、色っぽくていいんじゃないか？　男の肥大した妄想を刺激して」

「ははは、そりゃいい。今度皆に提案するか」

だが翌日から、月の満ち欠けがおかしくなった。
どうやら、準備中と哀れまれる案もストリップと見なされる案もお気に召さなかったらしい。毎晩の変化が新月→三日月→満月→三日月→新月のサイクルになり、間がなくなってしまった。

いくらなんでも極端すぎて風情がない。
近いうちにあの時の相手を誘って、また月見酒をしなければ……。

【週末の計画】

週末を利用して、月へ釣りに出かけた。

だが到着して虹の入江にある釣り船屋に行くと、管理人の月兎に「今日は大潮だから、静かの海も雨の海も船は出せないよ」と言われた。

あ、そうだ。
満月時と新月時は、月で海釣りはできないのだ。

前回新月で海が完全に干上がっているときに来てそう教えられたのに、すっかり忘れていた。
こんなことならもうちょっと足を伸ばして、火星の運河に行けばよかった。

せっかく来たのに手ぶらで帰るのもなんなので、宙港の土産物売り場で月魚の干物と名物・もちつきうさぎもちを買って帰った。

だがみんなからは「月くんだりまで行ってボウズか」「今どきうさぎもち買いに月に行く奴なんかいないよ」と馬鹿にされてしまった。

くっ。

次こそは……。

【取り分】

満月を眺めながら月見酒としゃれこんでいたら、月が降りてきて「儂にも酒をくれ」とせがまれた。

手持ちのカップ酒とつまみを分けてやると、月はその場で一気にがぶ飲みして三本ほど空けた。あげく、酔っ払って「うーい。呑んだ呑んだ……」とさっさと西の空に沈んでしまった。

「綺麗な月だったのに、ろくに見れなかったよ」

翌日、友人にこぼすと彼はとがめるように言った。

「お前、ひょっとして月見団子と酒を供えなかったんじゃないか？」

「そんなことして何の役に立つんだ」

「馬鹿。自分の分がちゃんと用意してあるって判れば、月だって焦って空から降りてきたりはしないんだ。昔の人の智恵を馬鹿にしちゃいけないよ」

そうか……。

そうか！？

【月夜ばなし】

友人の家に遊びに行って話しこむうちに、すっかり夜が更けてしまった。
泊まっていけと言われたが、明日は朝から仕事がある。帰らなければならないと言うと、彼は「夜道は危ないだろう。これ持ってけよ」と言って、沈みかけた月をひょいともぎ取り、紐をつけて棒の先にくくりつけた。
月提灯はほんのり明るく足元を照らしてくれて、無事家まで辿り着けた。
でもこんなことして、大丈夫なのか……？

案の定、翌日から月が昇らなくなった。

参ったなあ。今度の満月のときには、夜九時ごろに皆既月蝕が起こるのだ。天文ファンや小学生が楽しみにしているに違いない。
戻しかたが判らないので、早くまた彼の家に行かなければ。

【メタボリック・ムーン】

久しぶりに月を見たら、ずいぶん大きく見える。

「ちょっとちょっと、お月さん、太ったんじゃない？」

声をかけると、月は決まり悪げに応えた。

「ばれた？　やっぱり。最近動くのが面倒になってねえ」

「あんまり近づくとぶつかっちゃうよ」

「判ったよう……」

月はため息をつくと、西に向かってダッシュした。天頂からみるみるうちに西に沈み、しばらくして東からまた昇って西に向かう。一周するごとに少しずつ月は小さくなっていった。

五周ほどしてから、元の場所に収まった月が言った。

「さあ、どうだ。もういいだろう？」

加速による遠心力の増加で少し地球から離れた月は、自信たっぷりに言った。確かに、見慣れた範囲の大きさになっている。

「うん。いいね」

「ああ疲れた。少し休もう……」

「３６万キロ以内に近づかないように気をつけなよ」

「判ってるって。遠地点まで離れたからしばらく大丈夫だよ……おやすみ」

それきり月は沈黙した。

やれやれ。月のマラソンに付き合って、すっかり夜更かししてしまった。

「おやすみなさい」

私は４０万キロ地点に浮かぶやや小さな月をもう一度見て呟き、家に入って寝た。

【闇夜ばなし】

新月の晩、飲み屋で隣に座ったやつと意気投合して夜通し飲み明かした。私は途中で酔ってペースを落としたが、やつはザルのように底なしに呑み続けた。

朝方に別れた時は流石に千鳥足で去っていったが、それにしても凄いやつだった。

その晩、爪の先のような細い月が、よろよろと昇ってへろへろと西の空に沈んでいった。

月も二日酔いになるらしい……。

【月がとっても蒼いのは】

昔はな、月には二柱の神がいたのよ。蒼と紅の双子神がな。

だから月は蒼と紅の二色が割合を変えるだけで、いつもまん丸だった。よく満月の光は人を狂わせると言うが、昔の月二回、蒼と紅が半々になるときに降る紫の月光ほどではないのう。

ところがあるとき二人は喧嘩してしまったのよ。

自分だけが主役になれるとき――今で言うところの満月か新月の

ときじゃな――片方がちょいと貌を出して、色が混じってしまったせいだと言われておる。それで殺されてしまったのか、怒って出ていってしまったのか、紅の神がいなくなってしまった。

それ以来、蒼い月神だけが毎夜昇っては沈むようになったのよ。紅の月神の部分がすっぽり抜け落ちたまま、満ち欠けしながらなあ。

おしまい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5135y/

月夜ばなし

2011年11月17日21時04分発行